「妊娠中のネオニコチノイド系殺虫剤ばく露と小児アレルギー疾患の関連について：子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」に関するQ&A

第1.0版（2026年11月 6日）

1. 本文章の注意

本文章は、「妊娠中のネオニコチノイド系殺虫剤ばく露と小児アレルギー疾患の関連について：子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」の報道発表を補足することを目的として作成したものです。内容は、著者の見解であり、環境省の見解ではありません。

2. Q&A

Q1. この研究で何が新しく分かったのですか？

A.

日本全国約8,900組の母子を対象に、妊娠中のネオニコチノイド系殺虫剤ばく露と、6歳までのアトピー性皮膚炎やぜん鳴の「発症・経過パターン」を長期間追跡した結果、現在の日本における一般的なばく露レベルでは、これらのアレルギー疾患の持続的発症を引き起こす主要因である可能性は低いことが示されました。

単なる有無ではなく、「一過性」「持続型」といった経過に着目した点が特徴です。

Q2. ネオニコチノイド系殺虫剤は「安全」だと言っているのですか？

A.

本研究はネオニコチノイド系殺虫剤の安全性を評価したものではありません。

あくまで現在の日本の一般環境レベルにおける妊娠中ばく露が、小児アレルギー疾患の主要な原因とは考えにくいという結果が得られたというものです。

より高いばく露レベルや、他の化学物質との複合影響については、引き続き検討が必要です。

Q3.「一部で関連があった」とありますが、それは問題では？

A.

一部の殺虫剤成分と特定の症状パターンで関連が示唆されましたが、

- 妊娠時期による再現性がない
- 用量反応関係が明確でない
- 多重検定を考慮すると統計的に有意でない

といった理由から、偶然による可能性が高いと判断しています。総合的には一貫した関連は認められませんでした。

Q4. なぜ「トラジェクトリー（経過パターン）」で解析したのですか？

A.
アトピー性皮膚炎やぜん鳴は、成長とともに「治るもの」「続くもの」「後から出るもの」など多様な経過をとります。
単年の有無だけでは、環境因子が長期的な健康に与える影響を正確に評価できません。
本研究では、6 年間のデータを用いて経過全体を評価することで、より実態に即したリスク評価を行いました。

Q5. 妊婦さんは農薬を気にしなくてよい、ということですか？
A.

現在の日本の食品管理や農薬規制のもとでの一般的な生活において、
妊娠中のネオニコチノイド系殺虫剤へのばく露については、子どものアレルギーの大きな原因になる可能性は低いと考えられましたので、過度に不安を感じる必要はない、というのが本研究から言える点です。
一方で、バランスの取れた食生活や基本的な生活習慣が重要である点はこれまでと変わりません。

Q6. 海外では「農薬とアレルギーの関連」が報告されていますが？
A.
これまでにも他の農薬等の化学物質で、研究がなされてきましたが、ネオニコチノイド系殺虫剤については、人を対象とした長期疫学データは非常に限られていました。本研究は、その空白を埋めるものです。

Q7. 日本特有の結果ではありませんか？
A.
本研究は、日本の規制環境下における「現実的なばく露状況」を反映しています。
そのため、同様のばく露レベルの国や地域にとっては重要な参考データとなりますが、
ばく露がより高い地域への単純な一般化はできません。

Q8. 将来、規制や政策に影響しますか？
A.
本研究は、ネオニコチノイド系殺虫剤の科学的なリスク評価を補強する疫学的証拠を提供するものです。
これを受けて直ちに規制を変更する必要性を示すものではありませんが、

- 化学物質の優先順位付け

- 妊娠期リスク評価
- 次世代の環境保健政策

を検討するうえで、重要な基礎データになると考えられます。

Q9. この研究の限界は？

A.

主な限界として以下があります。

- 尿検体はスポット採取で、長期ばく露を完全には反映しない
- 全体としてばく露レベルが低く、高ばく露状況は評価できない

そのため、「影響が全くない」と断定する研究ではありません。

Q10. 今後どのような研究が期待されますか？

A.

- 複数化学物質の複合ばく露（ミクスチャー解析）
- 食習慣や腸内細菌叢との相互作用
- 学童期以降のぜん息・アレルギーへの影響

などを含め、より包括的な環境リスク評価が必要です。

JECS は今後も長期追跡を継続します。

Q11. 保護者向けに一言で言うと？

A.

現在の日本の生活環境において、妊娠中のネオニコチノイド系殺虫剤へのばく露が、子どものアレルギーを引き起こす主要な原因になる可能性は低いと考えられます。